

LECTURE BOOKS

角田文衛＋中村真一郎

おもしろく源氏を読む

源氏物語講義

RE BOOKS

角田文衛 | 中村真一郎

おもしろく源氏を読む

源氏物語講義

おもしろく源氏を読む
〔源氏物語講義〕

1980年1月25日第一刷発行

著者

角田文衛＋中村真一郎

発行者

原雅久

発行所

朝日出版社

〒101 東京都千代田区西神田3-3-5

電話263-3321(代) 振替東京4-46008

本文印刷・製本 凸版印刷株式会社

表紙・カバー・扉印刷 錦明印刷株式会社

装幀

栗津潔

0393-180185-0039

おもしろく源氏を読む〔源氏物語講義〕

角田文衛＋中村真一郎

目次

第二講『源氏物語』の時代——7

第三講紫式部の生涯——55

第四講『源氏物語』モデル考——97

第四講 紫式部と『源氏物語』

127

第五講 『源氏物語』と二十世紀文学

155

用語解説

197

源氏物語年立

209

参考図版

238

おわりに

249

注 本文中の＊は巻末に用語解説を付しました

第一講『源氏物語』の時代

この講義の目的といえますのは、いわゆる『源氏物語』解説をしていただくことではないわけです。角田先生は歴史、特に平安朝の歴史の実証的な研究家であられる。一方の私は、青年時代以来西洋の文学を読んできて、『源氏物語』というものを世界文学の流れの中でとらえて、ただ平安時代に『源氏物語』が書かれたというんじやなく、現代に『源氏物語』をよみがえらせることによって日本の近代の小説の流れをより豊かにしたいという目的で、『源氏物語』を論じてきたわけです。

端的にいうと、日本の近代の小説の歴史というのは、自然主義一辺倒ですね。その自然主義の系譜の中で忘れられたもの、あるいは捨てられたものを、『源氏物語』をよみがえらせることによって再生させたい。つまり、現代文学としての『源氏物語』をここへ引き出したい。そういう考えをいつも根底に置きながら、角田先生にいろいろお話を伺おうと思っているんです。そこで、角田先生は、この講義をどのような立場で進めてくださるんでしょう。

私は、単に『源氏物語』というものの、それだけをとらえないで、非常に裾野の広い平安時代の文学、特に女流文学の一つの頂点としてとらえていきたい。これだけのものは世界の歴史を見ても、

一つの奇蹟としかいえないと思うんですよ。なぜ、そういうものが生まれたか……、理屈はつけられませけれども、実際はわからない。それに比べてギリシャ・ローマの古典時代の小説なんてものはたわいなくて読めないです。悲劇とか抒情詩はいいですよ、すばらしいです。しかし、小説の分野は噴飯ものですよ。

『御伽草子』級ですね。

ええ、そんなもんです。中世、いわゆる西ヨーロッパの中世の小説だって、作品として見れば大したものはないです。中国のものだってそうです。六朝の小説、あるいは唐代の伝奇小説というようなものを見ても大したものじゃない。『今昔物語』の中なんかにさらにあるようなものばかりですよ。それを考えると、『源氏物語』は要するに奇蹟的な産物だと、小理屈をつけるよりも、そういうのが一番正直だと思うんです。

そこで、平安時代というのはどういう時代なのか、世界史的にどう位置づけられるべきかということをもまず考えなくてはなりません。その場合、日本だけで理解するんじゃないくて、外国と比較してみることによって、正しい位置づけというものができるんじゃないかと思います。

日本の奈良時代とか平安時代というのは、世界史的に言えば、古典時代——クラシカル・エイジ——に該当するわけです。たとえば中国で言えば、漢から始まって唐、五代くらいに至る時代で

すね。しかし、日本の古典時代というのは、自律的な発展でできたんじゃないに、大陸の文化の模倣によっているんです。遣隋使や遣唐使がそのいい例ですが、実は遣唐使で命を全うして帰ってくるのは二分の一以下なんですから、実際、命がけです。四隻ワンセットで行くんですけれども、一隻の乗員は、漕手やなんかも入れて二百人ぐらいです。都合八百人の人間が、政治や経済を離れて文化の吸収のために命がけで何回も海を渡っていったなんて国は、世界中にないですよ。これは大変なもんですね。

そうして、遅れちゃいかん、追い越せというわけで、大化の改新というものを起こして、そこで日本の古典時代が始まるんですが、日本の場合は古典時代の前期に該当するものがないと、私は思うんです。直ちに古典時代の中期に入ってくる。

古典時代の前期というのは、世界史的にいいますと、どういう特徴がございますか。

たとえば、漢、あるいはギリシャの、特にイオニアの古典文化をこらになると一番よくわかるんですが、哲学でいえば自然哲学の時代、文学では抒情詩の時代、そして初期の貨幣経済の時代です。それから、政治的には貴族政治の時代であって、それがギリシャのような通商国家の場合は、だんだんデモクラシーに向かって動いていくわけです。フェニキアもそうです。それから、大陸国家の場合は、中央集権制の官僚国家に向かって動き出す。ですが、前漢などでは一挙にそ

うならないで、古いものがまだ残っているんです。そういう古拙的な要素は呉楚七国の乱のような時代を経て次第に払拭されるんですが、その際まず血縁的な関係が払拭される。ですから春秋戦国時代には古くからの名門、つまり先祖をたどると神様にいってしまうような家柄が全部なくなるんです。

これは西洋でも同じでギリシャの場合、ヘラクレイトスの家系はエフェイソスの国家の王家ですが、それがエフェイソスのアルテミス神殿の神主さんになってしまうわけです。ローマの場合も、百年にわたるシビル・ウォーがあつて、ローマの名門貴族、もとの元老院貴族はほとんど放逐されてしまう。だから、ユリウス・カエサルのお父さんだって、どういう血統なのかよくわからないくらいのも、ごく低い家柄の貴族です。

ところが日本の場合、亡命がないことでわかるように、みんな吸収されてしまうんです。たとえば大化の改新によって、神様にさかのぼる名門貴族は、官僚貴族にばけちゃうわけです。外国の例からいえば、大伴にしても、中臣にしても、大化の改新の時期にまったくだめになってしまふはずなんです。あるいは、どこかの神社の神主さんにされてしまふとか。もちろん、日本でもそんな例があることはあります。出雲国造氏が千家、北島両家になったように。あるいは、阿蘇国造氏が阿蘇神社の神主になって、今日に至っているでしょう。しかし、それが日本の場合深刻なものにならないで、メッキされるわけですね。

ところで最近、各地方で平安時代の集落址が発見され、その発掘調査が行われているんですが、そのほとんどは竪穴の住居です。郡衙ぐんが（郡役所）の跡はちゃんとした掘立柱の建物ですけど、庶民の家というのは竪穴なんですね。

そうすると、竪穴の集落というのは、歴史上、どういう段階に当たりますか。

世界の歴史からいえば、古典時代の前の古拙時代——アルカイック・エイジです。

それはつまり、石器時代といっていいわけですか。

鉄器時代とか石器時代というのは、人間の技術史の立場から見た時代区分であって、私どもは排撃しているわけです。たとえば、日本の鉄器時代よりもマヤなどの新石器時代のほうが文化が進んでいるでしょう。ただ単に石を使っているから発展段階が低いという見方は、真の歴史的な見方じゃないというわけで、われわれは否定しているんです。世界史的に新しい時代区分でものを

考えていこうと。

そうすると、日本の奈良・平安時代というのは、表面は非常にきらびやかですけれども、下の階級、ことに地方の庶民生活には古い地金がまだ残っているということがいえるんです。つまり隋・唐文化を急いで吸収したため、生やケ現象が起こっており、表層だけが古典化したわけです。

そうしますと、地方ではまだいわゆる穴居生活みたいな状態だったわけですか。

そうです。横の穴居じゃなしに竪穴ですね。

歴史的にいうと、横のほうが古くて竪のほうが新しいわけですね。それは穴を掘ってそこに屋根をかぶせるという形ですか。

そう、竪穴住居は縄文時代の初めから行われています。これは穴を地面に掘り、そして、まわりに土手のようなものをつくっている。そうしないと、雨水が入ってきますから。その上に掘立小屋をつくるのです。そういう生活をやってたわけです。お粗末なものですよ。

だから、清少納言が『枕草子』で「なべてひなのものは卑し」といっているように、都鄙の懸隔というのが非常に大きい。都会といったら平城京とか平安京しかないわけです。そういうふうに、

日本の古典時代というのは都鄙の懸隔が著しい時代で、そこで行われたのは貴族、上層階級の文化である。しかし、そうだから文化の水準が低いなんてことはありません。ただ、それは後の鎌倉時代以後の文化を理解する場合に非常に重要だと思うんです。

つまり、貴族が勢力を失ってくると地金が出てくるわけで、地金は非常に古いんです。源実朝にしても、万葉調が好きだとかいうのは遅れているんですよ。やはり、『新古今集』といったものが理解できなければだめだと、私は思うんです。晩年の実朝は新古今に非常に傾倒するようになるけれども、やはり武家や庶民には愛しているのか愛してないのかわからない新古今調の歌よりも、アイ・ラブ・ユーという万葉調の歌がわかりやすいですわね(笑)。

それはともかく、そういう地金の古さは、日本の古典文化が、自分自身が創造した文化ではなしに、他から学んで一所懸命にそれを模倣した文化であることを示している。これは、文化の中心地じゃないかぎり、周辺社会においてどこにでも見られる現象なんです。古い貴族とか、古い家族制度とか、あらゆるものが破壊されずに残って、そこに新旧の妥協ないし混淆が起こってくる。こういうことをまず考えなくちゃならないわけです。たとえば、よく日本の近代には近代前期と称するものがないといわれますね。昨日まで刀を差していた人が、今朝汽車に乗るといった具合でしょう。ということは、産業革命による社会・経済的変動による苦勞なんて全然経験していない。つまり近代前期がなくて、中世からすぐ近代中期に飛び越えてしまう。しかし、地金は依然としてかわってない。平安時代というのもそれと同じことで、表層的な古典時代です。